

令和7年度 自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

岩手大学教学マネジメントセンター、岩手大学教務委員会

（責任者名） 山本 欣郎

（役職名） 理事（教育・学生担当）・副学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	<p>令和7年度の変更申請後は、本教育プログラムの構成科目のうち、数学基礎を担う「微分積分学Ⅰ」は、理工学部1年次の必修科目であり、「微分積分学Ⅱ」、「線形代数学A」、「線形代数学B」については、理工学部のコースごとに定められた組み合わせで3科目中2科目が1年次の必修科目である。プログラミング基礎を担う科目は、2年次以降に配置されており、理工学部のコースごとに定められた必修科目を組み合わせで構成されている。本教育プログラムの中核となる「数理・データサイエンス基礎および演習」、「AI基礎および演習」（以下、中核2科目）は理工学部1年次の必修科目である。そのため、理工学部では1年次から学生全員が本教育プログラムを履修している。令和7年度末現在、本プログラムを履修している学生は令和6年度入学生465名、令和7年度入学生452名であり、本教育プログラムの対象学年を母数とすると100%の履修率である。また、本学のLMSであるアイアシスタントやWeb Classを通じて、科目の担当教員、担任教員、教学マネジメントセンター、学務担当が、学生の履修状況（履修申告から課題の提出等）や科目の修得状況を確認し、サポートしている。</p>
学修成果	<p>本教育プログラムの構成科目のうち、令和7年度に実施されたのは、数学基礎を担う科目（「微分積分学Ⅰ」、「微分積分学Ⅱ」、「線形代数学A」、「線形代数学B」）、プログラミング基礎を担う科目のうち2年次学生を対象とする科目（「生命理工学演習Ⅱ」、「プログラミング言語入門」、「プログラミング言語及び演習Ⅰ」、「プログラミング言語及び演習Ⅱ」、「プログラム言語及び演習」、「FORTRAN実習」）、および中核2科目の「数理・データサイエンス基礎および演習」、「AI基礎および演習」である。中核2科目に対する令和7年度学生アンケートでは、「この授業の到達目標に対して、自身の達成度はどうでしたか？」という質問に対して、「十分達成できた」、「ある程度達成できた」という回答が、70%程度であった。この結果から、本教育プログラムの学修成果が高かったと判断できる。</p> <p>なお、令和7年度に変更申請を行ったため、1年次（令和7年度入学生）科目については変更申請後の科目名を、2年次（令和6年度入学生）の科目については変更申請前の科目名を記載している。</p>
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	<p>本教育プログラムの構成科目のうち、中核2科目に対する令和7年度学生アンケートでは、「この授業の内容は、理解できましたか？」という質問に対して、「十分理解できた」、「理解できた」という回答が、60%程度であった。一方で、「あまり理解できなかった」、「理解できなかった」という回答は、10%程度であった。この結果から、多くの学生について内容の理解度は高かったと判断できる。</p>
学生アンケート等を通じた後輩等の学生への推奨度	<p>本教育プログラムの構成科目のうち、中核2科目に対する令和7年度学生アンケートでは、「後輩等に推奨したいか」という質問は設定していない。これに近いものとして「この授業を総合的にみてどう評価しますか？」という質問があり、「非常に良い」、「良い」という回答が、70%程度であった。この結果から、後輩等への推奨度も高い水準になることがうかがえる。</p>
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	<p>令和7年度の変更申請後は、本教育プログラムの構成科目のうち、数学基礎を担う数学科目やプログラミング基礎を担う科目は、理工学部の必修科目を組み合わせで構成されており、中核2科目は理工学部の必修科目である。したがって、令和7年度の本教育プログラムの履修率は100%である。次年度以降も年次進行により理工学部全体の履修者数が伸びていく予定である。理工学部以外にも、教育学部は令和6年度に応用基礎レベルを取得しており、農学部、人文社会科学部も令和7年度に応用基礎レベルを取得している。このように、応用基礎レベルの教育プログラムの履修に向けて、全学的に取り組んでいる。</p>

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<p>学外からの視点</p> <p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p> <p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>本教育プログラムの修了生が卒業する令和9年度以降に、岩手県教育委員会及び企業等への卒業生アンケート項目に本プログラムの効果を問う設問を用意して外部の評価を受けつつ、その結果を踏まえてプログラムの改善に役立てる予定としている。</p> <p>岩手大学は、研究支援・産学連携センターを通じて、NTTドコモ等IT企業を始めとする産業界の様々な企業との産学連携を推進している。理工学部は、ミクニ、カオスエッジと連携して岩手県AI人材育成事業を推進している。また、理工学部で教員免許を取得し、高校教員になる者もいて、地元岩手県教育委員会とも意見交換を行っている。</p> <p>今後もこのような多くのチャンネルを通して、産業界からの視点を含めた本プログラムのPDCAを推進していく予定である。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>数学基礎を担う「微分積分学Ⅰ」、「微分積分学Ⅱ」、「線形代数学A」、「線形代数学B」の第1回目の講義において、数学の数理・データサイエンス・AIへの応用に触れ、これらを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」について、学生の関心を高める工夫をしている。</p> <p>中核2科目に対する令和7年度学生アンケートでは、「この授業を総合的にみてどう評価しますか?」という質問に対し、「非常に良い」、「良い」という回答が、70%程度であった。多くが肯定的な回答をしており、学生が意義を感じていることがわかる。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>中核2科目に対する令和7年度学生アンケートでは、「教員の説明は、わかりやすかったですか?」という質問に対して、「そう思う」、「やや思う」という回答が、60%程度であった。今後も演習を伴う科目については、ティーチングアシスタントを活用し、学生の「分かりやすい」をサポートしていく。</p> <p>また、急速に進展している生成AI等の話題を、科目「AI基礎および演習」で強化するなど、本教育プログラムの充実を図ることとしている。</p>